

Wh 島制約の緩和プロセス

石 岡 精 三*

Mitigation of the Wh-Island Constraint

Seizo ISHIOKA*

Key words : D-Linking, Phrase Balance, Wh-Island Constraint

0 . はじめに

Chomsky (2000, 2001) が提唱するフェイズ不可侵性条件 (Phase Impenetrability Condition, PIC) は, Wh 島制約に抵触する (1) から (3) の英語の用例すべてを不適格と予測する。本稿の第1節において述べるように, PIC は Wh 要素が Wh 島内部から移動する派生を生成不能とする効果をもつ。しかしながら, PIC が排除する (2a) と (3a) を基本的に適格と判断する話者グループが存在する。同様に, PIC は Wh 島制約に抵触する (4) と (5) のスペイン語の用例すべてを不適格と予測する。しかしながら, (4a) と (5a) のスペイン語の用例は, ある一定の条件下で Wh 要素が Wh 島内部から移動可能であることを示している。適格と判断される (4a) においては, 主語 Wh 要素 (*quién* 'who') が直接目的語 Wh 要素 (*qué película* 'what movie') の移動によって形成される Wh 島内部から移動している。

- (1) a.**Whati* did you wonder who had borrowed *ti*?
b.**Whoj* did you wonder *whati* *tj* had borrowed *ti*?
- (2) a.(?] Which books] did John wonder [which students] had borrowed *ti*? (Freidin 1995 :(22))
b.*[Which students] did John wonder [which books] *tj* had borrowed *ti*? (Freidin 1995 :(25))
c.*[Which students] did John wonder *tj* had borrowed [which books]? (Freidin p.c. (2004.12.5))
d.*[Which books] did she say who read *ti*? (Freidin 1992 : p.94, (36b))
- (3) a.(?] Which book] do you wonder who was going to buy *ti*? (Barss 2000 :(19))
b.**Whati* did you wonder who was going to buy *ti*? (Barss 2000 :(18))

原稿受付 : 平成17年5月20日

*長岡技術科学大学語学センター

- (4) a.¿Quién no sabes [qué película] dirigió ti tj en el cincuenta y uno? (Torrego 1984 :(68))
 'Who do you know what movie directed in '51''?
 b.*¿[Qué película] no recuerdas quién dirigió ti tj en el cincuenta y uno? (Torrego 1984 :(69))
 'What movie don't you remember who directed in '51''?
- (5) a.¿[A quién] dices que no te acuerdas quéj lei has dicho ti tj? (Torrego 1984 :(54a))
 'To whom do you say that you don't remember what you have said?'
 b.*¿Quéj dices que no te acuerdas [a quién] lei has dicho ti tj? (Torrego 1984 :(54b))
 'What do you say that you don't remember to whom you have said?'

同じく適格と判断されるスペイン語の用例(5a)でも、間接目的語 Wh 要素 (*a quién* 'to whom') が直接目的語 Wh 要素 (*qué* 'what') によって構成される Wh 島内部から移動している。

上で見たように、Wh 島制約をフェイズ不可侵性条件 (PIC) に還元することには問題があると思われる。本稿では、Wh 島内部からの Wh 要素移動を可能にするプロセスを想定し、このプロセスを欠陥バランス戦略 (Defective Balance Strategy) と呼ぶ。英語においては、このプロセスは、ある一定の構造条件を満たす場合に限り適用されると想定する。同様のプロセスがスペイン語の Wh 島事象だけでなく、ブルガリア語の多重疑問文にも適用可能であることを示す。¹⁾

本稿の構成は、以下のものである。第1節において、Chomsky (2000, 2001) による PIC の問題点を指摘する (Chomsky による PIC を PIC-1 と呼ぶ)。PIC と最小連結条件 (Minimal Link Condition, MLC) の同時採用は、冗長的な側面をもつ。なぜなら、MLC による多くの効果が PIC によってももたらされるからである。PIC の下でその適用範囲が狭められる MLC の全廃を目指し、すべての XP がフェイズ (Phase) を構成すると考える Müller (2004) による PIC に検討を加える (これを PIC-2 と呼ぶ)。この PIC-2 もまた、Wh 島制約の事象を適格に説明するものでないことを示す。第2節では、Müller (2004) が提唱する句バランス (Phrase Balance) に立脚する論法を提示し、この論法により、上の(4)と(5)などのスペイン語の用例と、(1)から(3)の英語の用例が説明されることを示す。第3節では、ブルガリア語の多重疑問文に検討を加える。スペイン語における Wh 島制約を説明する論法が基本的にブルガリア語の多重疑問文のふるまいも説明可能であることを示す。第4節は結びを構成し、本稿で提案する欠陥バランス戦略 (Defective Balance Strategy) と後述する貢献条件 (Contribution Condition, CC) に対して問題を惹き起こすと思われる用例に検討を加え、これに対するひとつの打開策を提示する。

1 . PIC・1 と PIC・2 の概要と問題点

1 .1 . PIC・1

Chomsky (2000) によれば、派生は C あるいは v を含む語彙配列によって決定されるフェイズを単位としてなされる。つまり、フェイズは派生における基本単位として機能し、フェイズ毎に演算処理が適用される。フェイズが下線で表記された(6)において、フェイズが HP から直接上位の ZP に移行すると、演算の適用が完了したとみなされる下位のフェイズ (HP) は、その一部分を除いて演算の適用に関して見えなくなり、演算の負担が軽減される。(7)にあるように、演算の適用に関して依然として見えるこの一部分として、主要部 (H) と先端部 (Edge) を想定している。本稿では、先端部とは Spec(H) と HP に付加した位置であると仮定する (Chomsky 2001 : p.13)

(6) [ZP ... Z [HP ... H YP]

(7) *Phase Impenetrability Condition* (PIC-1) (Chomsky 2000 : p.108)

In phase with head H, the domain of H is not accessible to operations outside ,
only H and its edge are accessible to such operations.

つまり、ZP フェイズにおいて適切に演算処理を受けするためには、YP 内の最大投射は H の先端部 (Edge) へ移動していなくてはならないのである。

(1) の用例で考えてみよう (説明上、vP フェイズの派生段階を割愛し、CP フェイズのみの派生段階である(8)で考える)。

(8) a. [CP who_i [C [t_i had borrowed what]]]

b. [CP who_i [C you wondered [CP t_i' [C [t_i had borrowed what]]]]]]

c. [CP [C [you wondered [CP what_j [CP who_i [C [t_i had borrowed t_j]]]]]]]]]]

素性による最小連結条件 (Featural MLC) により、(8a)における embedded C (embd.C) の素性 [*wh*] (Chomsky 2000 では [Q]) は、主語 Wh 要素 (*who*) との照合により削除される。次いで、matrix C の素性 [*wh*] が照合・削除される必要がある。この素性 [*wh*] は、embd.C の先端部に移動した主語 Wh 要素 (*who*) との照合により削除される (8b)。しかしながら、この派生は破綻する。これは、matrix V (*wonder*) の選択素性が満たされないためである。matrix V (*wonder*) は、その Spec 位置に顕在的な Wh 要素が生起する CP を要求するからである。それでは、その Spec 位置に主語 Wh 要素 (*who*) が生起する

embd.CP に目的語 Wh 要素 (*what*) が付加した派生である (8c) は収束するであろうか。先端部に移動した目的語 Wh 要素 (*what*) は matrix C の素性 [**wh**] を照合・削除できるのではないのであろうか。

派生に関する経済性が局所的に、例えば CP フェイズ毎に評価されると考えてみよう。目的語 Wh 要素 (*what*) が embd.CP に付加移動する誘因を embd.CP 内に見いだすことはできない。この付加移動の引き金となる素性等が embd.CP 内に存在しないからである。この付加移動は、単に matrix CP フェイズの収束を確保するためであると考えられる。結果として、この付加移動自体が経済性の原理から排除されることになる。つまり、(1) に対して収束する派生を想定することはできない。同様に、(2) と (3) の英語の用例もすべて崩壊する。(4) と (5) のスペイン語の用例も、すべて不適格と予測されることになる。しかしながら、この予測は問題を引き起こす。²⁾

1.2. PIC・2 (*Phrase Impenetrability Condition*)

フェイズのサイズが小さいほど、演算処理における負担がより軽減される。結果として探査要素 (Probe) とそれを照合する目標要素 (Goal) との局所性を規定することになる PIC-1 は、局所性の規定に関して、最小連結条件 (MLC) と部分的に重複する (MLC の効果の多くは、PIC-1 から導出される)。そこで、Müller (2004) は、すべての句 (phrase) がフェイズを成すと考える (Phrase Impenetrability Condition (PIC-2))。PIC-2 とそれに関連する概念の定義体系は以下の通りである。

(9) Phrase Impenetrability Condition (PIC-2) (Müller 2004 : (12)):

The domain of a head X of *a phrase XP* is not accessible to operations outside XP; only X and its edge are accessible to such operations.

(10) Feature Condition (FC) (Müller 2004 : (9)):

An (uninterpretable) [**F**] feature on X requires movement of an item marked [F] to the edge of X

(11) Last Resort (LR) (Müller 2004 : (10)):

Movement requires matching [F] and [**F**] at an edge.

(12) Strict Cycle Condition (SCC) (Müller 2004 : (11)):

Within the current XP, a syntactic operation may not target a position that is included within another XP that is dominated by .

移動の引き金となる探査素性 (Probe) である解釈不可能な素性 [*F*] が存在すると仮定する。[*F*] がその引き金となる移動に対して目標要素 (Goal) を構成するのが素性 [F] である。素性 [F] をもつ要素は、素性 [*F*] を付与されたゼロ範疇の先端部へ移動する (素性条件 (Feature Condition, FC))。すべての移動は、先端部 (Edge) での [F] と [*F*] との一致を要求する (すべての移動は、先端部 (Edge) での [F] と [*F*] との一致によってのみ駆動される) (最終手段) (Last Resort, LR))³⁾

次に、Müller (2004) が提唱する句バランス (Phrase Balance) について考える。Wh 要素が [-wh] CP 内部から長距離移動する派生 (13a) において、当該 Wh 要素が embd.Spec (C) の位置を経由する根拠は何であろうか。同様に、(13b) に対応する構造 (13c) の vP フェイズにおいては、Wh 要素 (*to whom*) を v の先端部へと移動させる素性が存在しないように思われる (v は V の目的語 NP (*the book*) と一致していて、これ以上 Wh 要素 (*to whom*) を引きつけることはないと考えられる))⁴⁾

この問題を打開すべく、Chomsky (2000 : p.109) は、例えば (13c) の v に随意的に EPP 素性が付与されると仮定している。明らかに、この前提は、派生の収束を可能にするためだけのものである。先端部位置への移動を可能にするために想定されたこの随意的 EPP 素性がもたらす効果が、何らかのより一般的な条件から導出されないであろうか。

- (13) a. What_i do you think [CP t_i] he bought t_i?
 b. To whom did John read the book?
 c. [vP to whom [vP John v [vP read the book t]]]

その方法として、Müller (2004) は、句バランスの概念を導入している。これは、あらゆる素性 [*F*] に関して、すべての句 (XP) に対してバランス状態を要求するものである。以下が、句バランスに関する定義体系である。

- (14) Phrase Balance (Müller 2004 : (14)):

Every XP has to be balanced: For every feature [*F*] in the numeration there must be a potentially available feature [F] at the XP level.

- (15) Potential Availability (Müller 2004 : (15)):

A feature [F] is potentially available if (i) or (ii) holds:

- (i) [F] is on X or edge X of the present root of the derivation.
 (ii) [F] is in the **workspace** of the derivation.

派生 D のワークスペース (Workspace) は概略, 語彙列挙 (Numeration N) の中で派生 D の段階でまだ利用されていないものを指す。句バランスにより, (13a) のような単一の Wh 要素が関与する派生における移動では, 移動要素がその始発点と最終着地点との間にあるすべての句 (XP) の先端部を経由することになる。単独の Wh 要素が関与する派生では, 当然のことながらそのワークスペース内に素性 [wh] をもつ他の Wh 要素がない。よって, 当該 Wh 要素は, 当該要素の生成位置を含む最小のフェイズの先端部へ移動する必要がある。この移動は, 素性の一致 (Feature Matching) によるものではない (この点で, この移動は (13) 最終手段に抵触する)。しかしながら, それが違反不可能である制約 (FC, SCC, PIC-2 と句バランス (Phrase Balance)) を満たす唯一の派生方法である場合に限り, 当該派生における最終手段への違反が許容されると想定される (つまり, この場合に限り, 素性の一致 (Feature Matching) が関与しない移動が可能となる)。例えば, 以下の (16) の派生で考えてみよう。

(16) (guess) what John read

- a. [VP read₃ what₁] Workspace :{ C[*wh*], John, T[*D*], v }
- b. [VP what₁ read₃ t₁] Workspace :{ C[*wh*], John, T[*D*], v }
- c. [vP what₁ John₂ v+read₃[VP t₁' t₃ t₁]] Workspace :{ C[*wh*], T[*D*] }
- d. [TP what₁ John₂ T[vP t₁" t₂ v+read₃[VP t₁' t₃ t₁]]] Workspace :{ C[*wh*] }
- e. [CP what₁ C[TP t₁"] John₂ T[vP t₁" t₂ v+read₃[VP t₁' t₃ t₁]]] Workspace :{ }

句バランスの要請から, VP フェイズ内に生成される Wh 要素 (*what*) は V の先端部へ移動する (16b)。同様に, 当該 Wh 要素は v と T それぞれの先端部を経由して, 最終着地点である Spec(C) へ移動する。既に述べたように, (16b) におけるような LR に違反する Wh 要素移動は, 句バランス等の違反不可能な派生が他に存在しない場合に限り適用される。(15-ii) の要請から, ワークスペース内に素性 [wh] が存在する派生では, この LR に違反する移動は許容されないことになる (句バランスを満たす他の派生が存在する)。同時に, この派生は, PIC-2 によって排除され, 不適格と予測される。このことは, 以下の優位条件 (Superiority Condition) が関与する用例によって示される。

(17) a. (I wonder) who_i t_i bought what_j (Müller 2004 :(17a))

b. *(I wonder) what_j who_i bought t_j (Müller 2004 :(17b))

(18) (Müller 2004 :(19a-d))

- a. [vP bought₃ what₂] Workspace :{ C[*wh*], who₁[wh], T[*D*], v }
- b. [vP who₁ v+bought₃[VP t₃ what₂]] Workspace :{ C[*wh*], T[*D*] }

- c. [TP who_i T [VP t_i v+bought_t [VP t_s what_t]]] Workspace : { C [*wh*] }
- d. [CP who_i C [TP t_i' [VP t_i v+bought_t [VP t_s what_t]]]] Workspace : { }

(17) の派生構造で (18a) からわかるように、VP はバランスがとれている。それは、そのワークスペース内に素性 [wh] (つまり、Wh 要素 (*who*)) が存在するためである。よって、Wh 要素 (*what*) が V の先端部へ移動することはない。換言すれば、当該 Wh 要素 (*what*) が VP 外部へ移動することはない (PIC-2)。結果として、(17a) のみが生成されることになる。

PIC-1 と同様に、PIC-2 は、本稿の (1) から (5) の用例のすべてを不適格と予測する。関係する Wh 要素が異なるフェイズ内に生成される派生においては、より上位の Wh 要素の素性がワークスペース内にあるため、下位の Wh 要素がそのフェイズ外へ移動することは許されない (より上位のフェイズ内に生成される Wh 要素が *embd.Sec(C)* へ移動する)。関係する Wh 要素が共に同じフェイズ内に生成される派生においては、一方の Wh 要素のみがその先端部へ移動可能である (この Wh 要素のみがこのフェイズの外へ出て、*embd.Spec(C)* へ移動する)。この何れの派生においても、*embd.Spec(C)* 位置に痕跡が生成される。これらの派生は、その *Spec* 位置に顕在的な Wh 要素が生起する CP を要求するという matrix V の選択素性を満たさないため、(1) から (5) の用例はすべて不適格と予測される。明らかに、この予測は事実と合致しない。⁵⁾

2. 欠陥バランス戦略 (Defective Balance Strategy, DBS)

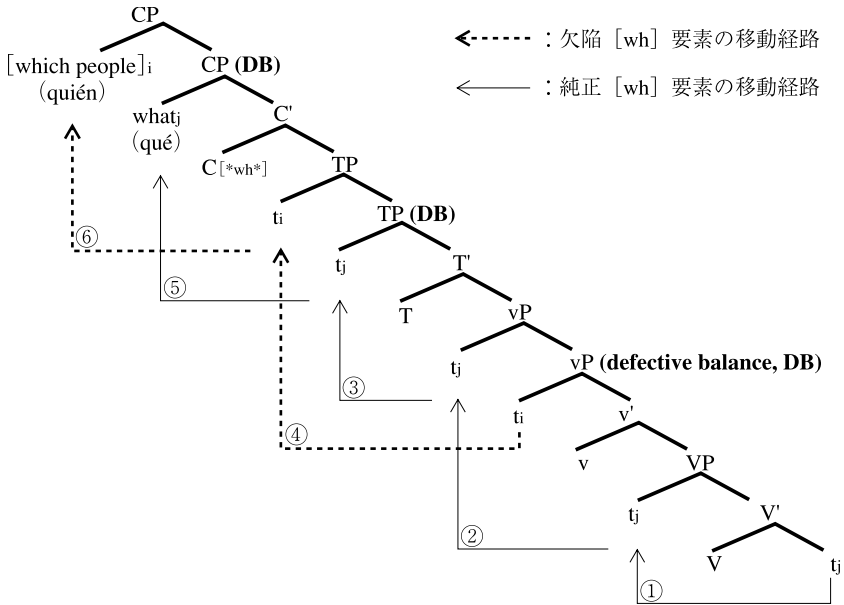
Müller (2004) は、談話 (Discourse) に連結された Wh 要素 (D-Linked Wh 要素) が生起する用例 (19A-a) と (19A-b) の相違を以下のように説明する。D-Linked Wh 要素が随意的にその素性 [wh] を欠くと想定する ((19A-b) において、*Spec(v)* 位置に生成される主語 D-Linked Wh 要素 (*which people*) の素性 [wh] が欠落している)。これにより、VP フェイズにおいて、Wh 要素 (*what*) はその先端部へ移動可能となる (この派生段階のワークスペースには素性 [wh] が存在しないと考えられる)。当該 Wh 要素 (*what*) は、順次、その *Spec* 位置に主語 Wh 要素 (*who*) が生成される *v* を含むすべてのフェイズの先端部を経由して、*Spec(C)* まで移動する。これにより、(19A-b) は生成されることになる ((19A-a) 中の主語要素は D-Linked Wh 要素でないため、当該用例は、上の (17b) と同様不適格と予測される)。

- (19A) a.*I know [which books] who_i read t_j (Müller 2004 :(46a))
 b. I know what_j [which people] read t_j (Müller 2004 :(46b))
 c.*I know [which people] what read
 d. I know who read [which books]

ここで、欠陥バランス戦略 (Defective Balance Strategy, DBS) を仮定する。(19A-b) における D-Linked Wh 要素 (*which people*) が、ワークスペース内における素性 [wh] を構成しないという点で、欠陥 [wh] 要素 (Defective [wh] Element) として機能すると考えてみよう (これにより、(19A-b) においてより下位のフェイズ内部に生成される Wh 要素 (*what*) の上昇移動が可能となる)。これと連動して、欠陥 [wh] 要素を含むフェイズが欠陥バランス (Defective Balance, DB) と指定されると考える。更にこの DB は、素性 [*wh*] を付与された最寄りの C の最大投射フェイズに到達するまで順次上位のフェイズに上昇浸透すると想定する (上昇浸透したフェイズ内部に生成された Wh 要素は欠陥 [wh] として機能する。欠陥 [wh] 要素として機能することのない通常の Wh 要素を純正 Wh 要素と呼ぶことにする)。上昇浸透によって DB と指定されたフェイズのバランスは、純正 [wh] 素性の Wh 要素が当該フェイズの先端部へ移動することに加えて、欠陥 [wh] 素性をもつ Wh 要素が当該フェイズの先端部への移動によって初めて確保されると想定する。⁶⁾

具体的に、(19A-b) の用例に対応する (19B) の派生構造で考える。

(19B) Defective Balance Strategy:



VP フェイズにおいて、目的語 Wh 要素 (*what*) は、V の先端部 (Spec(V)) へ移動する ()。vP フェイズにおいて、この Wh 要素 (*what*) は、v の先端部へ移動する (これにより、vP のバランスが確保される) ()。TP フェイズに入って、最初に純正 [wh] 要素をもつ Wh 要素 (*what*) が T の先端部へ移動する ()。次いで、欠陥 [wh] 素性もつ Wh 要素 (*which people*) が T の先端部へ移動する (これにより、TP のバランスが確保される) ()。同様に、CP フェイズにおいて、最初に Wh 要素 (*what*) が C の先端部 (Spec(C)) へ移動する ()。次いで Wh 要素 (*which people*) が C の先端部へ移動する (これにより、CP のバランスが確保される) ()。しかしながら、問題なのは、この派生様式によって生成されるのは (19A-b) ではなく、不適格と判断される (19A-c) の多重疑問文であることである。この問題は、欠陥 [wh] 素性をもつ要素がより上位にあるフェイズのバランス確保のために形成される連鎖 (+) の元位置 (in-situ) で発音されると仮定することにより打開されると思われる ([+Finite] CP 内において、主語 D-Linked Wh 要素の元位置として、主格 (Nominative) が照合を受ける Spec(T) を仮定する。目的語 D-Linked Wh 要素の元位置として、その生成位置を想定する)。 (19A-a) においては、より上位のフェイズに生成される

Wh 要素 (*who*) が D-Linked Wh 要素でないため、DBS は適用されない。これは、目的語 Wh 要素 (*which book*) が生成される VP フェイズのバランスが確保されているため、この目的語 Wh 要素が VP の先端部へ移動できないためである。PIC-2 が適用され、より上位のフェイズ内部に生成された Wh 要素 (*who*) が素性 [*wh*] を付与された embd. C の先端部へ移動する (19A-d) が生成されることになる。⁷⁾⁸⁾

(19A-b) の派生を説明すると思われる論法によって、(4) と (5) のスペイン語の用例の相違が適格に処理される (便宜上、当該用例を以下に再掲する)。

(4) a. ¿Quién no sabes [qué película] dirigió ti tj en el cincuenta y uno? (Torrego 1984 : (68))

‘ Who do you know what movie directed in ‘ 51 ’?’

b. *¿[Qué película] no recuerdas quién dirigió ti tj en el cincuenta y uno? (Torrego 1984 : (69))

‘ What movie don’t you remember who directed in ‘ 51 ’?’

(5) a. ¿[A quién] dices que no te acuerdas quéj le has dicho ti tj? (Torrego 1984 : (54a))

‘ To whom do you say that you don’t remember what you have said?’

b. *¿Quéj dices que no te acuerdas [a quién] le has dicho ti tj? (Torrego 1984 : (54b))

‘ What do you say that you don’t remember to whom you have said?’

(20) a[CP quién [CP[qué película] [TP dirigió . . . ti tj en el cincuenta y uno]]]

b[CIP[a quién] [TP le has dicho ti qué]]

c[CP[a quién] [CP[qué] [TP le has dicho ti tj]]]

欠陥 [wh] 素性が、より上位に生成された (つまり、始発点がより上位に指定された) [±D-Linked] Wh 要素に付与可能と考えてみよう (本稿の註 (7) を参照されたい)。主語 Wh 要素 (*quién* ‘who’) と直接目的語 Wh 要素 (*qué película* ‘what movie’) が生起する (4a) の用例について考える。(20a) の embd.CP 構造が生成されことになるが、これは、上の (19A-c) の embd.CP 構造に並行するものである (この状況は、派生構造 (19B) で示される)。CP フェイズの先端部にある Wh 要素の中でより上位にあり、欠陥 [wh] 要素として機能する主語 Wh 要素 (*quién*) が matrix C の素性 [*wh*] を照合・削除すると考える (この照合・削除のため、主語 Wh 要素 (*quién*) は、embd.Spec(C) で発音される。matrix C に素性 [*wh*] が付与されない派生では、欠陥 [wh] 要素として機能する主語 Wh 要素 (*quién*) は、その元位置で発音される) (embd.Spec(C) 位置に顕在的な Wh 要素 (*qué película* ‘what movie’) が生起するため、matrix V が [+wh] CP を要求するという選択素性も満たされる)。これにより、(4a) の

適格性が説明可能となる ((4b) は生成不能となる)。

直接目的語 (DO) と間接目的語 (IO) が共起する (5) のスペイン語の用例は、問題になるように思われる。それは、DO と IO が共に VP 内部に生成されると考えられるためである。つまり、IO と DO の一方のみが、VP の先端部に移動するだけでよい (これにより、VP のバランスが確保される) (双方の Wh 要素が VP の先端部に移動することはない)。IO が VP の先端部へ移動する派生では、(20b) が最も深く埋め込まれた C1P の構造となる。この embd.Spec(C1) へ移動した IO Wh 要素は最終的に matrix Spec(C) へ移動し、DO Wh 要素 (*qué*) は VP フェイズ内部にある。つまり、この場合の派生は、生成不能となる。このことは、DO Wh 要素 (*qué*) が VP の先端部へ移動する派生でも同様である。これにより、以下の Jaeggli (1982) が挙げる用例 (21a) と (21b) の非文法性が説明される (Jaeggli (1988) においては、主語要素と直接目的語要素が共起する用例の判断は、Torrego (1984) の用例 (4) と同様である (21c, d))。

(21) a.*[A quién] no sabías quéj lei regalaron ti tj? (Jaeggli 1982 : p.170, (4-151b))

‘ To whom don't you know what they had given? ’

b.*El único encargo quei no sabías [a quién] iban a dar ti tj cayó justo en tus manos.

(Jaeggli 1982 : p.170, (4-151a))

‘ The only task which you didn't know to whom they would give wound up right in your hands. ’

c.¿ Quiéni no sabes quéj compró ti tj? (Jaeggli1988 : (45a))

‘ Who don't you know what bought? ’

d.*¿ Quéj no sabes quiéni compró ti tj? (Jaeggli1988 : (45b))

‘ What don't you know who bought? ’

それでは、DO と IO が共起する (5a) と (5b) の相違はどのように説明されるのであろうか。Torrego (1984) が属する話者グループにおいて、適格な派生として、IO Wh 要素 (*a quién* 'to whom') が DO (*qué* 'what') が形成する Wh 島内部から移動する派生が可能である。これは、IO Wh 要素の始発点として、v よりも上位に生起する Spec(Agr-IO) が指定されると考えることにより可能となる (通例、IO 要素は、対応する IO 再述接語 (*le, les*) を随伴する)。これに対応する CP 構造である (20c) によって示されるように、IO WH 要素 (*a quién*) が長距離移動する派生が適格と予測される (Jaeggli (1982, 1988) が属する話者グループでは、Spec(Agr-IO) が IO Wh 要素の始発点と指定されることはないと考えられる)。また、IO Wh 要素と主語 Wh 要素が生起する用例においては、IO Wh 要素が長距離移動する用例が適格と予測される。このことは、(22a) の文法性によって例証される。主語 Wh 要素と対応する DO 再述接語 (例えば、*lo*) を随

伴するDO Wh が共起する用例において、DO Wh 要素が長距離移動する派生が適格と予測される（DO 再述接語を随伴する DO Wh 要素の始発点として、*v* よりも上位に生成される Spec(Agr-DO) が指定される）。この予測は、(22b) によって示される。適格と判断される(22b)は、不適格と判断される(4b)と好対照をなす。既に述べたように、(4b)における DO Wh 要素(*qué película*)は、対応する再述接語を随伴していない。(4b)が不適格と判断されるのは、DO Wh 要素の始発点として、Spec(Agr-DO)ではなく、主語 Why 要素(*quién*)の始発点よりも下位である *V* の Sister 位置が指定されるためであった。

- (22) a. [A cuáles de ellos] sabes quiénj no lesi dio tj ti una buena recomendación? (Suñer 1992 : (40c))
 ‘ Which of them do you know who didn’t give them a good recommendation? ’
 b. [Qué libro] no sabes quiénj loi compró ti tj? (Contreras 1992 : (11b))
 ‘ What book don’t you know who bought it? ’

次に、基本的に適格と判断される(3a)などの英語の用例に検討を加える(便宜上、(1)から(3)を以下に再掲する)。(4a)などのスペイン語の用例の適格性を説明する DBS は、Barss (2000) が挙げる用例(3a)を適格と予測する。これは、上のスペイン語の用例(22a-b)に並行するものである(長距離移動する DO Wh 要素が D-Linked Wh 要素であるため、その始発点として *v* より上位の Spec(Agr-DO) が指定可能となる)。(3b)の用例は不適格と予測されるが、そのわけは、Non-D-Linked Wh 要素(*what*)が主語 Wh 要素が構成する Wh 島を越えるからである。((2a)と(2d)の対比が示すように、Freidin (1992, 1995) が挙げる用例では、主語と DO 双方の Wh 要素が D-Linked Wh 要素である派生(2a)が許容される)。同じ論法により、(1a)は不適格と予測される。それは、DO である Non-D-Linked Wh 要素が主語 Wh 島内部から移動しているからである。適格と予測されるのは(1b)であるが、それは長距離移動する主語 Wh 要素(*who*)が DO Wh 要素(*what*)よりも上位に生成されるからである。しかしながら、実は、(1b)は予測に反して不適格と判断される。この問題を解消する論法を提示する前に、Adger (2003) が指摘する話者グループにおける判断を以下の(23)に示しておく。特に、(23b)と(23d)の適格性に対して、(23c)が不適切と判断される点が非常に興味深い。

- (1) a. *Whati did you wonder who had borrowed ti?
 b. *Whoj did you wonder whati tj had borrowed ti?

- (2) a. [?] Which books] did John wonder [which students] had borrowed ti? (Freidin 1995 : (22))
 b. * [Which students] did John wonder [which books] tj had borrowed ti? (Freidin 1995 : (25))
 c. * [Which students] did John wonder tj had borrowed [which books]? (Freidin p.c. (2004.12.5))
 d. * [Which books] did she say who read ti? (Freidin 1992 : p.94, (36b))
- (3) a. [?] Which book] do you wonder who was going to buy ti? (Barss 2000 : (19))
 b. ?*Whati did you wonder who was going to buy ti? (Barss 2000 : (18))
- (23) a. [Which city] did you ask [which king] invaded ti? (Adger 2003 : p.390, (65))
 b. [Which king] did you wonder tj invaded [**which city**]? (Adger 2003 : p.390, (68))
 c. * [Which king] did you ask [**which city**] tj invaded ti? (Adger 2003 : p.390, (66))
 d. ?*Whoj did you ask tj saw **what**? (Adger 2003 : p.390, (67))

DBS (Defective Balance Strategy) が適用される派生に関して、純正 [wh] 要素がその移動先 (embd.Spec(C)) 位置で発音されるスペイン語とは異なり、英語における純正 [wh] 要素は移動先 (embd.Spec(C)) ではなく、元位置で発音されると考えてみよう (移動先と元位置によって形成される連鎖が matrix V の選択素性を満たすと考える必要がある。疑問文 CP をその Sister 位置に生起することを要求する matrix V の選択素性は、その Spec 位置に生起する顕在的な Wh 要素の生起だけでなく、移動先と元位置によって形成される連鎖によっても満たされると考える必要がある) ((23) のような複数の C に素性 [*wh] が付与される派生とは異なり、単一の C に素性 [*wh*] が付与される優位条件が関与する派生では、欠陥 [wh] 要素として機能する要素がその元位置で発音されると仮定している点に留意されたい)。これにより、(23) の英語の用例が説明可能となる。(23c) は、純正 [wh] 要素 (*which city*) の発音位置が不適切であるため、不適格と予測される ((23b) が適切な出力となる)。(23b) と (23d) は全く並行する派生形式に従っている (Adger (2003) が提供する (23d) の用例では、Non-D-Linked Wh 要素 (*who*) が欠陥 [wh] 要素として機能している点で、特筆すべき話者グループに属する用例である。当該話者グループにおいて、単一の C に素性 [*wh*] が付与される優位条件が関与する用例では、D-Linked Wh 要素のみが欠陥 [wh] 要素として機能する)。(23a) では、DO である D-Linked Wh 要素 (*which city*) の始発点として、Spec(Agr-DO) が指定される (主語 Wh 要素 (*which king*) は、元位置 (厳密には Spec(T) 位置) で発音される)。Freidin と Barss が提供する話者グループの用例では、この DBS の適用が DO D-Linked Wh 要素と主語 Wh 要素が共起する派生 ((23a) のタイプ) に限定されているように思われる。つまり、(2a) と (3a) における主語 Wh 要素は Spec(C)

ではなく、Spec(T)位置で発音されているように考えられる。

以下の(24)はすべて、下接の条件(Subjacency Condition)、そして本稿のDBS(Defective Balance Strategy)によって不適格と予測される。しかしながら、Chomsky(1980: p.37)によれば、ほとんどの話者が(24b)を(24a)よりもかなり認容度が高いと判断する。Freidin and Lasnik(1981)では、主語Wh要素がembd.Spec(C)位置へ移動しないことと(24b)の認容度向上とが関連づけられる(Chomsky(1986)の空移動仮説(Vacuuous Movement Hypothesis))、(24b)が完全に文法的と判断されないのは、matrix V(*wonder*)の選択素性がembd.Spec(C)位置におけるWh要素の生起からmatrix VとWh要素の隣接へと緩んでいるためだとされる。Freidin and Lasnik(1981)は、主語Wh要素と類似のふるまいを示すものとして、付加語Wh要素(*how well*)の用例(25a)を挙げている(当該付加語が何らかの要因によって、embd.Spec(C)とembd.Spec(T)の間の位置へ移動すると前提した場合)。Freidin and Lasnik(1981)自身が指摘しているように、認容度が向上する(24b)と(25a)を説明する彼等の論法は、(25b)と(25c)の双方に対しても認容度の向上を予測する。しかしながら、彼等自身が指摘しているように、(25c)は(25b)ほど認容度が高くない((25c)の認容度は向上しない)(Freidin and Lasnik 1981: fn.14)。

(24) a.*?Whoi did you wonder whatj ti saw tj? (Chomsky 1980 : (105))

b.?? Whatj did you wonder whoi (ti) saw tj? (Chomsky 1980 : (106))

(25) a.??Whati did you wonder [how well] he did ti tj? (Freidin and Lasnik 1981 : fn.14, (i))

b.?[Which book] do you wonder [how well] the students read ti?

(Freidin and Lasnik 1981 : fn.14, (ii))

c.*?[Which students] do you wonder [how well] read ti? (Freidin and Lasnik 1981 : fn.14, (iii))

d.*Howi do you wonder who fixed the car ti? (Chomsky 1986 : p.49, (107))

本稿のDBSは、(23)の判断が下される話者グループにおいても、(24a)を生成不能と予測する。(24b)の認容度の向上は、DO Wh要素(*what*)(と主語Wh要素(*who*))がD-Linked Whと解釈された派生として説明される。DO Wh要素(*what*)の始発点と指定されるSpec(Agr-DO)は、主語Wh要素(*who*)の始発点(Spec(v)よりも上位である(前者のDO Wh要素が欠陥[wh]要素として機能し、Wh島から脱出する)。完全に適格と判断されないのは、複合Wh要素が生起する(2a)と(3a)の場合とは異なり、単純Wh要素に対するD-Linked Wh要素として解釈が周辺的であることに還元される。このことは、(25a)にお

ける認容度の向上に対しても当てはまる（この前提となる付加語移動が周遍的に適用されると考えられる）。この場合もまた、DO Wh 要素（*what*）が D-Linked Wh 要素と解釈され、その始発点として Spec(Agr-DO) が指定される。付加語 Wh 要素（*how(well)*）の始発点（生成位置）として主語 Wh 要素の始発点（Spec(v)）と Spec(Agr-DO) の間の位置を想定してみよう。つまり、DO Wh 要素（*what*）は欠陥 [wh] 要素として機能する。複合 DO Wh 要素（*which book*）が生起する（25b）では、D-Linked Wh 要素としての解釈は問題なく実現される。（25b）の周遍性は、付加語移動の周遍性に起因する。（25c）においては、主語 Wh 要素（*which students*）の始発点として、Spec(v) が指定される。付加語 Wh 要素（*how well*）の始発点が主語 Wh 要素のそれよりも上位となるので、（25c）は生成不能と予測される。（25d）の非文法性が示すように、その始発点がより上位に指定される付加語が欠陥 [wh] 要素として機能することはないと考えられるからである。

3. ブルガリア語の多重疑問文

（17）と（19）の英語の用例に立ち戻り、それぞれ（26）と（27）として再掲する。

- (26) a. I wonder_i who_i bought what_j (Müller 2004 : (17a))
 b. *I wonder_i what_j who_i bought t_j (Müller 2004 : (17b))

- (27) a. *I know [which books] who_i read t_j (Müller 2004 : (46a))
 b. I know what_j [which people] read t_j (Müller 2004 : (46b))
 c. *I know [which people] what read
 d. I know who_i read [which books]
 e. I know [which people] read what

単純 Wh 要素が生起する（26）では、DBS が適用されない。つまり、（26a）は適格と予測される（（26b）は、PIC-2 によって排除される）。既に述べたように、（27b）の派生において、Spec(v) にある主語 D-Linked Wh 要素（*which people*）が欠陥 [wh] 要素として機能する。しかしながら、問題なのは、DBS の適用によって生成されるのが（27c）となることである。この問題は、欠陥 [wh] 素性をもつ要素がより上位にあるフェイズのバランス確保のために形成される連鎖の元位置（in-situ）で発音されると仮定することにより打開されると仮定した（[+Finite] CP 内において、主語 D-Linked Wh 要素の元位置として、主格（Nominative）が照合を受ける Spec(T) を想定し、目的語 D-Linked Wh 要素の元

位置として、その生成位置を想定している)。つまり、欠陥主語 [wh] 要素は、その元位置 (Spec(T)) で発音されることになる。基底生成された位置 (Spec(v)) にあるD-Linked 主語 Wh 要素 (*which people*) が必然的に欠陥 [wh] 要素として機能するわけではない。(26a)と同様に、当該主語 Wh 要素が PIC-2 の適用を受けて、単独で C の先端部 (Spec(c)) へ移動する派生も適格と予測される (27e)。

(27a) の非文法性について考えよう。主語 Wh 要素 (*who*) は、Spec(v) に生成される (当該位置が主語 Wh 要素の始発点となる)。DO Wh 要素 (*which books*) の始発点としてその生成位置が指定されると考えてみよう (Spec(v) が主語 Wh 要素の始発点となる)。上位にある主語 Wh 要素が単純 Wh 要素であるため、当該要素が欠陥 [wh] として機能することはない。つまり、欠陥バランス戦略 (DBS) が適用されない。PCI-2 の適用により、(27d) が生成されることになる。(27d) はまた、DO Wh 要素 (*which books*) の始発点として Spec(Agr-DO) が指定される派生の出力となる (本稿の註(7)で指摘したように、基底生成された位置ではなく Spec(Agr-DO) が始発点と指定される D-Linked Wh 要素 (*which books*) が PCI-2 に参加することはないと仮定する。基底生成された位置にある Wh 要素 (英語の優位条件が関与する事例では、D-Linked Wh 要素) のみが PCI-2 の適用を受けて単独で C の先端部 (Spec(C)) へ移動するか、あるいは DBS を適用するかを選択できる)。つまり、始発点と指定される Spec(Agr-DO) が DBS の適用を指定することになる。純正 Wh 要素 (*who*) が C の先端部 (Spec(C)) に生起し、欠陥 [wh] 要素がその元位置で発音される派生としても、(27d) は生成されることになる。

次に、ブルガリア語の多重疑問文について考える。すべての Wh 要素が義務的に統語移動する点を除き、(28) から (30) のブルガリア語の用例は、(26) の英語の用例に並行する。(28) と (29) のブルガリア語用例は、スペイン語の Wh 島内部からの移動用例における *embd. CP* 構造 (20b) と似ている。主語 Wh 要素 (*koj* 'who') は、DO Wh 要素 (*kakvo* 'what'; *kogo* 'whom'; *na kogo* 'to whom') の左方に生起している。

- (28) a. *Koj kakvo vižda?* (Pesetsky 2000 : p.22, (43a))
 who-Nom what-Acc sees [cf. *Who bought what?*]
 b. **Kakvo koj vižda?* (Pesetsky 2000 : p.22 : (43b))
 ' *Who sees what?* [cf. **What did who buy?*]

- (29) a. *Koj kogo vižda?* (Billings and Rudin 1996 : (8a))
 who-Nom whom-Acc sees
 b. **Kogo koj vižda?* (Billings and Rudin 1996 : (8b))
 ‘ Who sees whom? ’
- (30) a. *Koj na kogo e dal ximikalkata?* (Billings and Rudin 1996 : (13a))
 who-Nom [to whom] Aux gave the-pen-Acc
 b. **Na kogo koj e dal ximikalkata?* (Billings and Rudin 1996 : (13b))
 ‘ Who gave the pen to whom? ’

スペイン語と同様、単純 Wh 要素に対しても欠陥 [wh] 素性が付与され、DBS が適用されると考えてみよう（スペイン語と英語における優位事象と異なるのは、対応するブルガリア語の優位事象における DBS の適用が義務的である点である）。さらに、DBS が適用された場合の欠陥 [wh] 要素の発音位置が、純正 [wh] 要素と同様、その移動先であると考えてみよう。例えば (28) において、主語 Wh 要素 (*koj*) の始発点は、DO Wh 要素 (*kakvo* ‘what’) の始発点よりも上位にある。最終の CP フェイズにおいて、その始発点がより下位である純正 [wh] をもつ DO Wh 要素 (*kakvo*) が Spec(C) へ移動し、欠陥 [wh] 要素として機能する主語 Wh 要素 (*koj*) が CP に左方付加した位置へ移動する。(29) と (30) でも同様で、主語 Wh 要素の始発点が DO Wh 要素 (*kogo* ‘whom’) と IO Wh 要素 (*na kogo* ‘to whom’) の始発点よりも上位でなければならない。

(31) で示すように、非心理動詞 (Non-Psychological Verb) と共起する主語 Wh 要素 (*kakvo* ‘what’) の始発点として、Spec(v) が指定される (31b)。主語 Wh 要素 (*koj* ‘who’) では、Spec(T) が始発点として指定される (31a)。DO Wh 要素 (*kogo* ‘whom’, *kakvo* ‘what’) の始発点として、その生成位置、あるいは v よりも上位に生成される Spec(Agr-DO) が指定される (31c)。その生成位置 (VP 内部)、あるいは v よりも上位に生成される Spec(Agr-IO) が IO Wh 要素 (*na kogo* ‘to whom’) の始発点を構成する (31d)。心理動詞と共起する主語 Wh 要素 (*koj* ‘who’, *kakvo* ‘what’) の始発点として、Spec(v)、あるいは V の Sister 位置が指定される (31e)。これらの前提により、上の (28) から (30) にある用例の相違が説明可能となる。その始発点がより上位に指定される Wh 要素が欠陥 [wh] 要素として振る舞うため、当該要素が純正 [wh] 要素よりも左方に生起することになる（それぞれの (b) が生成不能となる）。(28b)、(29b) と (30b) の非文法性は、非心理動詞と共起する主語 Wh 要素 (*koj* ‘who’) の始発点として Spec(v) を指定できないことを示す（この Spec(v) 位置が始発点と指定

される派生は適格と予測されることになるからである)。 (32) の用例は、非心理動詞と共に起する主語 Wh 要素 (*kakvo* 'what') の始発点として、Spec(v) が指定されること示す。

(31) The Starting points of Wh-phrases:

- a. Spec(T) is designated as the starting point of the human subject wh-phrase (*koj* 'who')
- b. Spec(v) is designated as the starting point of the non-human subject wh-phrase (*kakvo* 'what')
- c. Either the base-position (V's sister position) or Spec(Agr-DO) is designated as the starting point of the [± human] direct object wh-phrases (*kogo* 'whom', *kakvo* 'what')
- d. A VP-internal position or Spec(Agr-IO) is designated as the starting point of the indirect object wh-phrase (*na kogo* 'to whom')
- e. In psychological verb constructions, either the base-position or Spec(v) is designated as the starting point of the thematic (subject) wh-phrase (*koj* 'who', *kakvo* 'what')

(32) a. *Kogo kakvo e udarilo?* (Billings and Rudin 1996 : (12a))

whom-Acc what-Nom Aux hit

b. *Kakvo kogo e udarilo* (Billings and Rudin 1996 : (12b))

'What hit whom?'

しかしながら、以下の (33b) と (34a) は問題を提起するように思われる ((34c) については、後述する)。本稿の仮説群は、(33) と (34) のすべてを適格と予測する。(33a) において、DO Wh 要素 (*kogo* 'whom') の始発点として Spec(Agr-DO) が指定される (IO Wh 要素 (*na kogo* 'to whom') の始発点として VP 内の位置が指定されるからである)。 (33b) では、IO Wh 要素 (*na kogo* 'to whom') の始発点として Spec(Agr-IO) が指定される (V の Sister 位置が DO Wh 要素 (*kogo* 'whom') の始発点となる)。つまり、(33a-b) が共に、適格と予測されることになるのである。これは、(34a-b) においても同様である。

(33) a. *Kogo na kogo e pokazal Ivan?* (Billings and Rudin 1996 : (16a))

whom-Acc [to whom] Aux showed Ivan-Nom

b. **Na kogo kogo e pokazal Ivan?* (Billings and Rudin 1996 : (16b))

'Whom did Ivan show to whom?'

(34) a. **Kakvo na kogo e kazal Petür?* (Rudin 1986 : p.119, (82b))

what-Acc [to whom] Aux said Petür

b. *Na kogo kakvo e kazal Petür?* (Rudin 1986 : p.119, (82c))

'What did Petür say to whom?'

c. *Koj kakvo na kogo kaza?* (Billings and Rudin 1996 : (24a))

who-Nom what-Acc [to whom] Aux said

'Who said what to whom?'

次に、心理動詞 (Psychological Verb) の用例に検討を加える。Belletti and Rizzi (1988) と Franco and Huidobro (2003) と同様に、心理動詞における主格を付与される主題 (Theme) 要素は V の Sister 位置に生成されると考える。当該要素の始発点として、その生成位置、あるいは Spec(v) が想定される (31e)。同様に、本稿の仮説群は、心理動詞が生起する用例 (35) と (36) のすべてを適格と予測する。基本的に不適格と判断される (36a) が問題となる。

- (35) a. Koj na kogo mu xaresva? (Billings and Rudin 1996 : (14a))
 who-Nom [to whom] CL (to him) is-pleasing
 b. Na kogo koj mu xaresva? (Billings and Rudin 1996 : (14b))
 ‘ Who is likable to whom? ’

- (36) a. ?***Kakvo** na kogo mu xaresva? (Billings and Rudin 1996 : (15a))
 what-Nom [to whom] CL (to him) is-pleasing
 b. Na kogo **kakvo** mu xaresva? (Billings and Rudin 1996 : (15b))
 ‘ What is likable to whom? ’

(33b) の非文法性は、Billings and Rudin (1996) が提案する制約に還元できるであろう。これは、同音の Wh 要素連続 (ここでは、*kogo-kogo*) を排除する効果をもつ (PF) 規制である (この制約に関しては、Bošković (2002) も併せて参照されたい)。⁹⁾

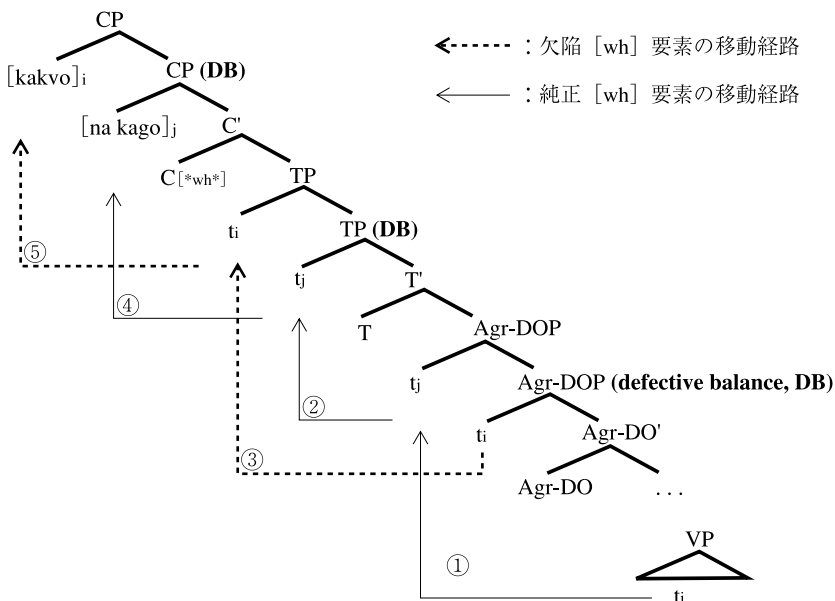
結果として、本稿の仮説群に対して問題を提起すると思われる用例は、主語、あるいは直接目的語である Wh 要素 (*kakvo* ‘what’) が生起する (34a) と (36a) だけである。これらの Wh 要素に付与される格 (Case) は異なるものであるが、その生成位置は共に V の Sister 位置である。問題を提起すると思われる (34a) と (36a) の双方において、この Wh 要素 (*kakvo*) が欠陥 [wh] 要素として機能している点に留意されたい。ここで、以下の仮説を想定してみよう。これは、V の Sister 位置に生成され、同時に欠陥 [wh] 要素として機能する Wh 要素 (*kakvo*) が、その先端部が他の異なる Wh 要素の始発点と指定される上位フェイズの DB の解消 (つまり、この上位フェイズのバランスの確保) に貢献することを要求するものである (これを、本稿では貢献条件 (Contribution Condition, CC) と呼んでいる)。この種の Wh 要素 (*kakvo*) が欠陥 [wh] 要素として機能するためには、当該 Wh 要素の始発点を含むフェイズよりも上位のフェイズ内部に Wh 要素が生成されるか、あるいは当該上位フェイズの先端部がさらに異なる Wh 要素の始発点と指定されなければならない。

(37A) Contribution Condition (CC)

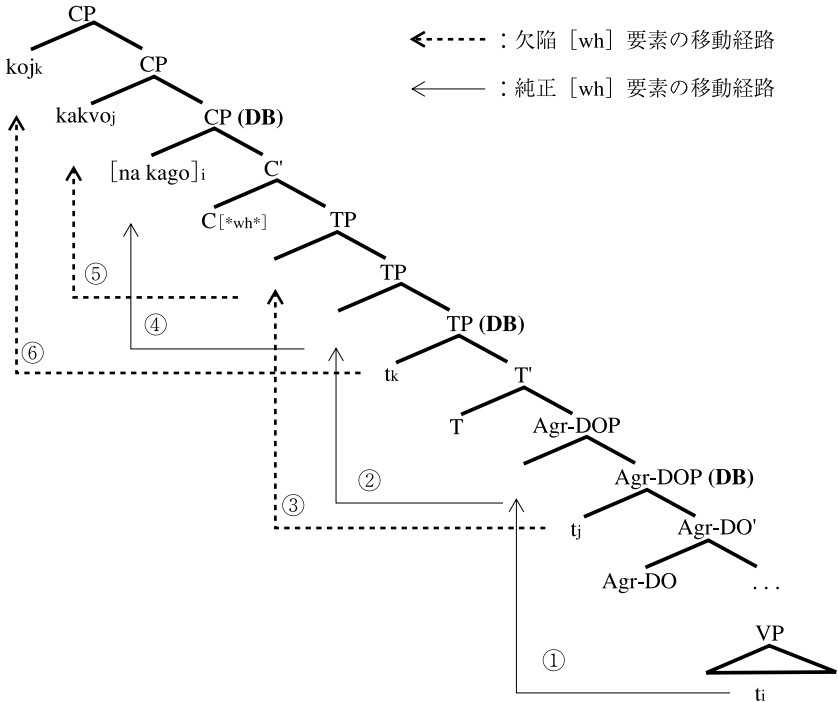
The Wh-phrase (*kakvo*) base-generated in V's sister position which functions as a defective [wh] element has to contribute to the cancellation of Defective Balance (DB) of an upper phase (XP) whose edge position is designated as another wh's starting point.

V の Sister 位置に生成される Wh 要素 (*kakvo* 'what') が欠陥 [wh] 要素として機能していない (34b) と (36b) は、この貢献条件 (CC) によって排除されることはない。これは、当該 Wh 要素が純正 [wh] 要素として機能しているため、CC が適用されないからである (欠陥 [wh] 要素として機能しているのは、その始発点がより上位の Spec (Agr-IO) と指定される IO Wh 要素 (*na kogo* 'to whom') である)。不適格と判断される (34a) に対応する派生構造である (37B) を以下に示す。構造 (37C) は、適格と判断される (34c) の派生構造である。

(37B) Defective Balance Strategy:



(37C) Defective Balance Strategy:



(34a) と (36a) の双方において、IO Wh 要素 (*na kogo* 'to whom') の始発点として、VP 内部の位置が指定される。DO Wh 要素 (*kakvo* 'what') の始発点として指定されるのは、それぞれ Spec(Agr-DO) と Spec(v) である。これらの位置が IO Wh 要素 (*na kogo*) の始発点よりも上位であるため、DO Wh 要素 (*kakvo*) が Defective [wh] 要素として機能することになる (IO Wh 要素は、純正 [wh] 要素として機能する)。 (34a) に対応する派生構造 (37B) において、欠陥 [wh] 要素として機能する DO Wh 要素 (*kakvo*) の始発点を含むフェイズよりも上位のフェイズ内部に Wh 要素が生成されることはない (と の移動経路が関係する TP フェイズと CP フェイズ内部に他の Wh 要素が生成されることもなく、これらのフェイズの先端部が他の Wh 要素の始発点と指定されることもない)。つまり、(34a) は、上の貢献条件 (CC) によって排除されることになる (このことは、(36a) でも同様である)。それに対して、(34c) は貢献条件 (CC) の要請を満たす。(34c) に対応する派生構造 (37C) において、DO Wh 要素 (*kakvo*)

の始発点を含む Spec(Agr-DO) フェイズよりも上位にある TP フェイズの先端部は、主語 Wh 要素 (*koj*) と指定されている。移動経路が示すように、DO Wh 要素 (*kakvo*) は、この TP フェイズの DB 性解消 (つまり、当該 TP フェイズのバランス確保) に貢献している。これにより、(34c) の適格性が導出される。

次に、(38) のような付加語 (Adjunct) Wh 要素と項 (Argument) Wh 要素が共起する用例に検討を加える。その始発点として Spec(T) が指定される主語 Wh 要素 (*koj* 'who') と付加語要素が共起する用例では、常に主語 Wh 要素が欠陥 [wh] 要素として機能する。これは、VP フェイズ内部に加えて、付加語 Wh 要素の生成位置として Spec(v) と Spec(T) の間にあるフェイズの先端部を仮定しているためである。つまり、当該主語 Wh 要素が付加語 Wh 要素の左方に生起する派生が適格と判断される。

- (38) a. *Koj kak pätuva?* (Billings and Rudin 1996 : (17a)
 who-Nom how travels
 b.**Kak koj pätuva?* (Billings and Rudin 1996 : (17b)
 ' Who travels how? '
 c. *Koj küde šte spi?* (Billings and Rudin 1996 : (18a)
 who-Nom where Aux sleeps
 b.**Küde koj šte spi?* (Billings and Rudin 1996 : (18b)
 ' Who will sleep where? '

内項 (Inner Agument) Wh 要素と指示的付加語 Wh 要素が共起する用例は、特に、貢献条件 (CC) との関連から、興味深いふるまいを示す。(39a) の適格性は、貢献条件 (CC) の適用が、関係する Wh 要素 (*kakvo*) と項 Wh 要素との共起を前提とすることを示している。ここで、(39a) において貢献条件 (CC) が適用される考えてみよう。(39a) において、DO Wh 要素 (*kakvo* 'what') の始発点として Spec (Agr-DO) が指定される。VP 内部が、付加語 Wh 要素 (*koga* 'when') の始発点となる。つまり、前者の DO Wh 要素 (*kakvo* 'what') が欠陥 [wh] 要素として機能することになる。当該 Wh 要素の始発点を含むフェイズよりも上位の位置に他の Wh 要素が生成されることもなく、これらのフェイズの先端部が他の Wh 要素の始発点と指定されることもない。しかしながら、この前提の下では、貢献条件が (39a) を排除するという問題が起こる。(39b) においては、付加語 Wh 要素 (*koga* 'when') の始発点として、Spec(v) と Spec(T) の間にあるフェイズの先端部が指定される。例えば VP 内部が、DO Wh 要素 (*kakvo* 'what') の始発点となる。より上位のフェイズの先端部がその始発点として指定

される付加語 Wh 要素 (*koga* 'when') が欠陥 [wh] 要素として機能するため, (39b) は適格と予測されることになる。(40a-b) と (41a-b) も同様に, 適格と予測されることになる。

(39) a. *Kakvo koga e kupil?* (Billings and Rudin 1996 : (21a))

what-Acc when Aux bought

b. *Koga kakvo e kupil?* (Billings and Rudin 1996 : (21b))

' When did he buy what? '

(40) a. *Kogo kŭde ŝte videli?* (Billings and Rudin 1996 : (20a))

whom-Acc where Aux saw

b. *Kŭde kogo ŝte videli?* (Billings and Rudin 1996 : (20b))

' Whom did you see where? '

(41) a. *Kakvo kŭde raste?* (Billings and Rudin 1996 : (22a))

what-Nom where grows

b. *Kŭde kakvo raste?* (Billings and Rudin 1996 : (22b))

' What grows where? '

同じく内項 (Inner Argument) Wh 要素と付加語 Wh 要素が共起する用例に対して異なる判断を下す話者グループの存在が確認される。この話者グループにおいては, [付加語 Wh 要素 + 内項 Wh 要素] の連続が排除される ([内項 Wh 要素 + [±指示的] 付加語 Wh 要素] の連続は許容される) ((38) のタイプの用例に対しては, 同じ判断が下される)。¹⁰⁾ Bošković (1997: fn.9) は, (42) と (43) の判断を下す話者グループに加えて, (43a) と (43b) の双方を適格と判断する話者グループの存在を指摘している。

(42) a. *Kogo kak e tselunal Ivan* (Bošković 1997 : (14a) } Bošković 2002 : (41a))

whom-Acc how Aux kissed Ivan

b. ?**Kak kogo e tselunal Ivan* (Bošković 1997 : (14b) } Bošković 2002 : (41b))

' How did Ivan kiss whom? '

(43) a. *Kogo kŭde e vidjal čovekŭt?* (Bošković 1997 : (14c))

whom-Acc where Aux saw the man

b. ???*Kŭde kogo e vidjal čovekŭt?* (Bošković 1997 : (14d))

' Whom did the man see where? '

少なくとも (39) から (41) の用例を説明すると思われる欠陥バランス戦略 (DBS) による説明法を採用する限りにおいて, 上で確認された異なる話者グル

ープの相違を、関係する付加語 Wh 要素に対して単一の生成位置（あるいは、その始発点の相違）を想定することによって説明することには問題があるように思われる。既に述べたように、本稿では、[± 指示的] 付加語 Wh 要素の生成位置として VP 内部の位置に加え、主語 Wh 要素 (*kakvo* 'what') の生成位置である Spec(v) と主語 Wh 要素 (*koj* 'who') の始発点である Spec(T) の間にあるフェイズの先端部が指定されると考えている。これにより、(39) から (41) の用例のすべてが適格と予測され、(40) から (43) のすべての用例が適格と予測されることになり、問題である。

本稿の仮説群は、非指示的付加語 Wh 要素が生起する (44) から (46) のすべてを適格と予測する。例えば心理動詞が生起する (44a) において、Wh 要素 (*koj* 'who') の始発点と指定されるのは Spec(v) である。付加語 Wh 要素 (*zašto* 'why') の始発点としては、VP 内部が指定される。(44b) では、付加語 Wh 要素の始発点として Spec(v) よりも上位にあるフェイズの先端部が指定される。その生成位置、あるいは Spec(v) が、Wh 要素 (*koj* 'who') の始発点となっている。このように、(44a) と (44b) の双方が適格と予測されることになる（これは、(45) と (46) でも同様である）。しかしながら、本稿でその存在が確認されている話者グループ (Billings and Rudin (1996); Rudin (1986) と Bošković (1997, 2002) が提示する話者グループ) のすべてにおいて、[非指示的付加語 Wh 要素 (*kak* 'how', *zašto* 'why') + 項 Wh 要素] の語順は不適格と判断される。

- (44) a. *Koj zašto ti xaresva?* (Billings and Rudin 1996 : (19a))
 who-Nom why CL (to you) is-pleasing
 b.**Zašto koj ti xaresva?* (Billings and Rudin 1996 : (19b))
 ' Who is likable to you why? '

- (45) a. *Kakvo zašto ti xaresva?* (Rudin p.c(2005/3/29))
 what-Nom why CL (to you) is-pleasing
 b.**Zašto kakvo ti xaresva?* (Rudin p.c(2005/3/29))
 ' What is likable to you why? '

- (46) a. *Kakvo kak/zašto raste?* (Rudin p.c(2005/3/29))
 what-Nom how/why grows
 b.**Kak/Zašto kakvo raste?* (Rudin p.c(2005/3/29))
 ' What grows how/why? '

この問題は、非指示的付加語 Wh 要素もまた、(37A) の貢献条件 (CC) に従うと想定することにより打開されると思われる。つまり、V の Sister 位置に生成さ

れる Wh 要素 (*kakvo* 'what') とこの非指示的付加語 Wh 要素 (*kak* 'how', *zašto* 'why') を並列することにより, (37A) が (47) のように拡張されることになる。(34a) の非文法性を説明する論法によって, (44b), (45b) と (46b) は非文と予測されることになる ((42b) もまた, 不適格と予測されることになる。(43b) の非文法性は, 当該話者グループにおける指示的付加語 Wh 要素 (*kŭde* 'where') が (47) の貢献条件 (CC) に従うと考えることにより説明される。

(47) Contribution Conditions (CC)

The wh-phrase (*kakvo*) base-generated in V's sister position, and the non-referential adjunct Wh-phrases (*kak*, *zašto*), when functioning as a defective [wh] element, have to contribute to the cancellation of Defective Balance (DB) of an upper phase (XP) whose edge position is designated as another wh's starting point.

本稿の用例 (34) において検討したように, (48a) の場合とは異なり, (48c) における Wh 要素の連続 [*kakvo+na kogo*] が貢献条件 (CC) に抵触することはない。それは, V の Sister 位置に生成され欠陥 [wh] 要素として機能する Wh 要素 (*kakvo* 'what') が主語 Wh 要素 (*koj* 'who') が生起するフェイズの DB の解消 (つまり, 当該フェイズのバランス確保) を目指して, 当該フェイズの先端部へ移動しているためである。当該 DO Wh 要素 (*kakvo*) が純正 [wh] 要素として機能する (48b) と (48d) では, CC が適用されることはない ((48b) と (48d) は, 適格と予測される)。 (49) の用例は, (48) の用例と並行するものである。 (49a) と (49c) において, 非指示的付加語 Wh 要素 (*kak* 'how') は, 欠陥 [wh] 要素として機能する。 (48a) と同様に, (49a) は貢献条件 (CC) によって排除されることになる。 (49c) が貢献条件に抵触することはない。それは, 欠陥 [wh] 要素として機能する非指示的付加語 Wh 要素 (*kak* 'how') が主語 Wh 要素 (*koj* 'who') が生起するフェイズの DB の解消 (つまり, 当該フェイズのバランス確保) を目指して, 当該フェイズの先端部へ移動しているためである。当該 Wh 要素 (*kak*) が純正 [wh] 要素として機能する (49b) と (49d) では CC が適用されることはないので, (49b) と (49d) は, 適格と予測される。

- (48) a. ***Kakvo na kogo** e kazal Petŭr? (Rudin 1986 : p.119, (82b)) (34a)
 what-Acc [to whom] Aux said Petŭr
 b. Na kogo **kakvo** e kazal Petŭr? (Rudin 1986 : p.119, (82c)) (34b)
 ' What did Petŭr say to whom? '
 c. **Koj kakvo na kogo** kaza? (Billings and Rudin 1996 : (24a)) (34c)
 who-Nom what-Acc [to whom] Aux said

- d. Koj na kogo **kakvo** kazal? (Billings and Rudin 1996 : (24b))
 ' Who said what to whom? '

- (49) a. ?***Kak kogo** e tselunal Ivan? (Bošković 1997 : (14b) Bošković 2002 : (41b))
 how whom-Acc Aux kissed Ivan
 b. Kogo kak e tselunal Ivan (Bošković 1997 : (14a) Bošković 2002 : (41a))
 ' How did Ivan kiss whom? '
 c. Koj **kak kogo** e tselunal? (Bošković 2002 : (42b))
 who-Nom how whom-Acc Aux kissed Ivan
 d. Koj kogo kak e tselunal? (Bošković 2002 : (42a))
 ' Who kissed whom how? '

4 . 結 び

ブルガリア語の二重目的語構文 (Double Object Construction: V+NP₁+NP₂) は、興味あるふるまいを示す。当該構文の NP₂ に対応する Wh 要素 (*kakvo* 'what') が V の Sister 位置に生成されると考える (Müller (2004: p.300) は、NP₁ の始発点として Spec(V) が指定されると考えている。後述する論法では、VP 内部に生成される NP₁ と NP₂ の位置関係が関与することはない)。Bošković (1997) と同様、NP₁ に対応する Wh 要素の始発点として、その生成位置に加えて Spec(Agr-DO₁) が指定される。NP₂ に対応する Wh 要素の始発点として、その生成位置の他に Spec(Agr-DO₂) も指定される。Spec(Agr-DO₁) が Spec(Agr-DO₂) よりも上位に生成されると想定する (Bošković 1997: pp.239-240) (後述する本稿の論法では、これらの Spec 位置の相対関係が問われないが)。この前提の下で、本稿の仮説群は、(51d) を除くすべての用例を適格に説明する。(51e-h) は、すべて生成不能となる。それは、始発点が最も上位のフェイズ内の Spec(T) と指定される主語 Wh 要素 (*koj* 'who') が Wh 要素連続の左端位置を占める派生のみが生成されるためである) (50a)(= (51a)) において、NP₁ Wh 要素 (*kogo* 'whom') の始発点として Spec(Agr-DO₁) が指定され、NP₂ Wh 要素 (*kakvo* 'what') の始発点として VP 内部が指定される。前者の NP₁ Wh 要素 (*kogo* 'whom') が欠陥 [wh] 要素として機能し、NP₂ Wh 要素 (*kakvo* 'what') が純正 [wh] 要素として機能するため、当該派生は適格と予測されることになる (貢献条件 (CC) は適用されない)。同様に 貢献条件が適用されない (50c) (= (51c)) もまた、適格と予測されることになる。(48a) と並行して、(50b)(= (51b)) は、貢献条件 (CC) によって排除されることになる。(50d) (= (51d)) において、DO Wh 要素 (*kakvo*) の始発点である Spec(Agr-DO₂) よりも上位のフェイズ内に主語 Wh 要素の始発点が指定されるため、当該用例は、(48c) の場合と同様に、適格と

予測されることになる（この予測は（50d）に対しては妥当である）。しかしながら、不適格と判断される（51d）は、本稿の仮説群に対して問題を提起することになる。

- (50) a. Kogo kakvo e pital Ivan? (Bošković 2002 : (43a))
 whom-Acc what-Acc Aux asked Ivan
 b. ?***kakvo kogo** e pital Ivan? (Bošković 2002 : (43b))
 ‘ Whom did Ivan ask what? ’
 c. Koj kogo kakvo e pital? (Bošković 2002 : (44a))
 d. Koj **kakvo kogo** e pital? (Bošković 2002 : (44b))
 ‘ Who asked whom what? ’
- (51) a. Kogo kakvo e pital Ivan? (Roumyana Slabakova p.c(2005.4.1))
 whom-Acc what-Acc Aux asked Ivan
 b. ?***kakvo kogo** e pital Ivan? (Roumyana Slabakova p.c(2005.4.1))
 ‘ Whom did Ivan ask what? ’
 c. Koj kogo kakvo e pital? (Rudin 1986 : p.116, (72a)) (Roumyana Slabakova p.c(2005.4.1))
 d. ?*Koj **kakvo kogo** e pital? (Rudin 1986 : p.116, (72b)) (Roumyana Slabakova p.c(2005.4.1))
 e. *Kakvo koj kogo e pital? (Rudin 1986 : p.116, (72c))
 f. *Kakvo kogo koj e pital? (Rudin 1986 : p.116, (72d))
 g. *Kogo koj kakvo e pital? (Rudin 1986 : p.116, (72e))
 h. *Kogo kakvo koj e pital? (Rudin 1986 : p.116, (72f))
 ‘ Who asked whom what? ’

(51b) と (51d) の非文法性が貢献条件 (CC) ではなく、(51b) と (51d) を生成不能とする何らかの別の要因に還元されると考えてみよう。(51d) の判断が下される話者グループにおいては、二重目的語構文における *kakvo* (what) + *kogo* (whom) の連続が排除されると考えてみよう（換言すれば、二重目的語構文における NP₂ Wh 要素 (*kakvo*) が欠陥 [wh] 要素として機能できないと考えてみよう）。この効果は、この話者グループの二重目的語構文における Spec (Agr-DO₂) が NP₂ の始発点として機能することはないと仮定することにより導出される。当該話者グループにおいては、NP₂ Wh 要素 (*kakvo*) の始発点として VP 内部の位置が指定されることになるため、当該 Wh 要素 (*kakvo*) は常に純正 [wh] 要素として機能することになる。つまり、Wh 要素 (*kakvo*) がその右端位置を占める Wh 要素連続のみが生成されることになる（当該 Wh 要素が Wh 要素連続の右端位置を占めることのない (51b) と 851d) は、生成不能となる）。(50) の判断が下される話者グループでは、Spec (Agr-DO₁) と Spec (Agr-DO₂) が共に始発点として機能する。このように考えれば、(50d) の適格性と (51d) の非文

法性が説明される。¹¹⁾

Spec(v) に生成される主語 Wh 要素 (*kakvo* 'what') と付加語 Wh 要素 (*küde* 'when') が共起する (52a) と (52b) の対比もまた、本稿の仮説群に対して問題を提起するように思われる。(32) と (41) の用例で確認したように、Spec(v) に生成される主語 Wh 要素 (*kakvo* 'what') は貢献条件 (CC) に従うことはない (便宜上、(32) と (41) を以下に再掲する)。付加語 Wh 要素に対して、VP 内部、あるいは Spec(v) と Spec(T) の間にあるフェイズの先端部を仮定している。つまり、本稿の仮説群は、(32) と (41) の場合と同様に、(52a) と (52b) の双方を適格と予測する。しかしながら、(52a) は不適格と判断される。その一方で、(52a) の非文法性は、当該用例における貢献条件の関与を示唆すると思われる (既に確認したように、貢献条件に従う欠陥 [wh] 要素が Wh 要素連続の左端位置を占めることはない)。

(52) a. ?***Kakvo** küde te udari? (Billings and Rudin 1996 : fn.10, (i))
what-Nom where CL-Acc (you) hit?

b. Küde **kakvo** te udari? (Billings and Rudin 1996 : fn.10, (ii))
'What hits you where?'

(32) a. Kogo **kakvo** e udarilo? (Billings and Rudin 1996 : (12a))
whom-Acc what-Nom Aux hit

b. **Kakvo** kogo e udarilo (Billings and Rudin 1996 : (12b))
'What hit whom?'

(41) a. **Kakvo** küde raste? (Billings and Rudin 1996 : (22a))
what-Nom where grows

b. Küde **kakvo** raste? (Billings and Rudin 1996 : (22b))
'What grows where?'

既に述べたように、V の Sister 位置に生成され欠陥 [wh] 要素として機能する Wh 要素 (*kakvo* 'what') は、項である Wh 要素を随伴する場合に貢献条件 (CC) に従う。ここで、Spec(v) に生成される主語 Wh 要素 (*kakvo* 'what') が Wh 要素でない項要素を随伴する場合にも貢献規制 (CC) に従うと考えてみよう。これにより、直接目的語の接語 (*te* 'you') が共起する (52) において、貢献条件 (CC) が適用されることになる。(52b) において、Spec(v) 位置がその始発点である主語 Wh 要素 (*kakvo* 'what') に純正 [wh] として機能する。付加語 Wh 要素 (*küde* 'where') の始発点として、Spec(v) よりも上位のフェイズの先端部が指定される。貢献条件 (CC) が適用されないため、この派生は、適格

と予測される。VP 内部が付加語 Wh 要素 (*kūde* 'where') と主語 Wh 要素 (*kakvo* 'what') の始発点がそれぞれ VP 内部と Spec(v) と指定される派生である (52a) において、後者の主語 Wh 要素 (*kakvo* 'what') が欠陥 [wh] 要素として機能する。この派生は、貢献条件 (CC) によって排除される。(32) と (41) では、CC が適用されないため、当該用例はすべて適格と予測される。¹²⁾

註

- 1) 本稿の匿名レフリーも指摘するように、[+Finite] CP である Wh 島内部からの Wh 要素の移動が基本的に排除される英語の話者グループも存在する。つまり、この話者グループにおいては、(2a) は (1a) と (2b-d) よりも認容度が高くなる傾向が認められるが、基本的に不適格と判断される (この意味で、Chomsky (2000, 2001) の PIC が適確な予測をもたらす)。換言すれば、当該話者グループにおいては、本稿で提唱される欠陥バランス戦略 (Defective Balance Strategy) が適用されないことになる。この欠陥バランス戦略が適用されるのは、(2a) と (3a) のタイプを本質的に適格と判断する話者グループにおいてである。本稿の匿名レフリーも指摘するように、この話者グループ、さらに本稿の (23) の判断を下す話者グループの詳細を調査する必要がある。(4) と (5) にあるスペイン語の用例からもわかるように、当該言語の状況は、対応する英語の状況とは異なるものである。一律に Wh 島内部からの移動が排除されるのではなく、一定の構造条件を満たす場合に限り、Wh 島内部からの項 Wh 要素の移動が許容される。スペイン語の用例において、文頭と文末に疑問符が付される点に留意されたい (文頭の疑問符は、反転形 (*¿*) で用いられる)。文頭の反転疑問符 (*¿*) と、文法性判断の疑問符 (*?*, *?*) との相違に注意されたい。
- 2) PIC-1 に関する記述の概略は、Ishii (2000) による (詳細は、当該論文を参照されたい)。英語とスペイン語では、同一の CP 内における多重疑問文 (Multiple Question) が許容されない。これは、当該言語において多重 Spec (Multiple Spec) 構造が存在しないことを物語ると考えられる (Ishii 2000 : p.321)。これにより、(1a) の派生に対応する構造 (8c) において、embd.C の先端部 (Edge) に二つの Wh 要素が生起することはない ((1a) と (1b) が生成不能として、不適格と予測される)。本稿では、(8c) に類似する embd.CP への付加移動を想定する。後述するように、この付加移動の引き金は embd.CP フェイズ内にあると考えられる。
- 3) ある派生が違反不可能である制約 (Feature Condition, SCC, PIC-2 と後述する句バランス (Phrase Balance)) を満たす唯一の方法である場合に限り、当該派生において最終手段 (LR) 違反が許容されると想定される (Müller 2004 : p.298)。この場合に限り、素性の一致によらない先端部への移動が可能となると考えている。
- 4) この箇所では、従来の Spec (AgrO) (本稿では、Spec (Agr-DO) と表記する) を v の外部 Spec 位置と見なしている。本稿では、主語要素がその Spec 位置に生成される v よりも上位の位置に Agr-DO の投射が生成されると考えている。
- 5) D-Linked Wh 要素が関与する優位条件については、本稿の第 2 節で検討する
- 6) 各フェイズにおいて、純正 [wh] 素性を付与された要素の移動が欠陥 [wh] 素性を付与された要素のそれと先行すると想定する。二つの Wh 要素が生起する派生においては、欠陥 [wh] 要素として機能する Wh₁ の生成位置 (XP フェイズの先端部、あるいは X' に付加した位置) に関わりなく、純正 [wh] 素性を付与された Wh₂ が XP フェイズの先端部を経由して Spec(C) へ移動し、Wh₁ が CP に左方付加した位置へ移動する (これにより、CP フェイズの先端部における Wh 要素の相対語順 [Wh₁+Wh₂] が確保される。本稿では、

派生が XP フェイズに到達した段階で XP フェイズ内部に生成された欠陥 [wh] 要素が当該フェイズの先端部に生起、あるいは先端部に移動すると考える (X' に付加した位置に生成された欠陥 [wh] 要素が Spec(X) へ移動すると考える)。つまり、純正 [wh] 素性を付与された Wh₂ は、XP に左方付加した位置を経由して Spec(C) へ移動する。次いで、Wh₁ がその先端部 (Spec(X) あるいは XP に付加した位置) から CP に左方付加した位置へ移動する (XP などの最大投射の間にあるフェイズでも同様)。

- (i) a[CP ... [XP ... Wh₁ ... [YP... Wh₂ ...]]]
 b[CP ... [XP ... Wh₁ ... [YP... Wh₂ ... [ZP...Wh₃ ...]]]]

3つの Wh 要素が生起する (ib) の XP フェイズの派生段階において、欠陥 Wh 要素 (Wh₂ と Wh₁) は共に XP の先端部にある (Wh₂ が Wh₁ よりも上位にある)。フェイズが上位の最大投射 (HP) に移った段階で、純正 [wh] 素性を付与された Wh₃ が当該フェイズの先端部へ移動する。次いで、欠陥 [wh] 要素 (Wh₂ と Wh₁) が HP フェイズの先端部 (HP に左方付加した位置) へ移動する。[Wh₂ Wh₁] の順に左方付加移動が最終フェイズである CP まで繰り返されると前提する。最終の CP フェイズにおいて、純正 [wh] 要素 (Wh₃) が Spec(C) へ移動し、欠陥 [wh] 要素が [Wh₂ Wh₁] の順で CP に左方付加した位置へ移動する (これにより、[Wh₁+Wh₂+Wh₃] の相対語順が形成されることになる)。

- 7) 述べするように、ブルガリア語では、各フェイズのバランス確保のための移動によって形成される複合連鎖の最終移動先で発音される。この欠陥バランス戦略 (DBS) が完結する CP フェイズにおいて、欠陥 [wh] 素性は純正 [wh] 素性に置き換えられる。Kayne (1983 : fn.13) が指摘するように、ある特定の話者グループにおいて、D-Linked Wh 要素が生起した派生においても優位条件が遵守される。

- (i) a.*?I want to know what book which students took home with him. (Kayne 1983 : fn.13)
 b.*?The police are trying to figure out which taxi which robber got into. (Kayne 1983 : fn.13)

(19A-a) において、DO Wh 要素 (*which books*) の始発点として Spec(v) よりも上位の Spec(Agr-DO) が指定される派生に対して、どのような予測がなされるか。Spec(Agr-DO) 位置にある Wh 要素 (*which books*) が欠陥 [wh] 要素として機能する (主語 Wh 要素は、純正 [wh] 素性が付与される)。欠陥 [wh] 要素が元位置 (この場合、DO の生成位置) で発音されると想定されている点に留意されたい。つまり、この場合の派生の出力として、(19A-d) が指定されることになる。DO Wh 要素に対してより上位である Spec(Agr-DO) がその始発点として指定される派生における DBS は、義務的に適用されると考える必要がある。DBS が適用されないと考えた場合には、(19A-a) が適格と予測されることになる (仮に、その生成位置が始発点と指定される Wh 要素に対して PIC-2 が適用可能であると考える) (第3節で、この点に立ち戻る)。

一方、スペイン語では、優位条件が適用されないように見える。仮に、スペイン語の Non-D-Linked Wh 要素にも欠陥 [wh] 素性が付与可能と考える (スペイン語において、DBS が適用された場合の主語要素と目的語要素の始発点として、それぞれの生成位置が指定される。定動詞は、T 位置にある。欠陥 [wh] 要素の発音位置として、その元位置 (生成位置) が指定される)。後述するように、スペイン語の Wh 島内部からの Wh 要素移動の事例においても、Non-D-Linked Wh 要素が欠陥 [wh] 要素として振る舞うと想定する。

- (ii) a. Juan sabe quién dijo qué (Jaeggli 1982)

- John knows who said what
 ‘ John knows who said what. ’
 b. Juan sabe qué dijo quién (Jaeggli 1982)
 ‘ John knows what who said ’
 c. [A quién] envió quién regalos? (Bošković 1997 : fn.22)
 [to whom] sent who presents
 ‘ Who sent presents to whom? ’

しかしながら、(iii) の用例では優位条件が適用されている。これは、スペイン語における DBS の適用は純正 [wh] 要素が生成される最小の [+Finite] CP 内に限定されると想定することにより説明される (純正 [wh] 要素と欠陥 [wh] 要素の始発点が同一の最小 [+Finite] CP 内にある場合に、DBS が適用可能となる)。

- (iii) a. ?*¿Qué dijo quién que Juan compra ti? (Bošković 1997 : fn.22)
 what said who that Juan buys
 ‘ What didi who say that Juan buys? ’
 b. ?*¿Qué le ha pedido [a quién] que compre ti? (Hornstein 1995: p.142, (73a))
 what CL (him) has asked whom that buy-Subjunctive
 ‘ What has she asked whom to buy? ’

- 8) ここで、ミニマリストプログラムの観点からスペイン語における Wh 制約を説明しようとする Sabel(2002) が引き起こす問題点に言及する。多重 Spec(C) が前提され、長距離移動する Wh 要素は、Wh 島を形成する C のより外部の Spec 位置を経由する。この Spec 位置にある中間痕跡が演算子 (Operator) を構成しないため、当該痕跡は *t と標示される (適切な派生が生成するためには、この中間痕跡 (*t) が削除される必要がある)。この削除が適切に適用されるためには、この中間痕跡が演算子-変項連鎖 (Operator-Variable Chain) の内部にある必要がある (Uniform Chain の内部では、この中間痕跡の削除が適用されない)。演算子-変項連鎖は、以下の (ia-b) の双方の条件を満たす必要がある。

- (i) a. A' ... (A') ... A (Sabel 2002 : (16))
 b. ' ... (') ...

ドイツ語とオランダ語においては、主語 Wh 要素、直接目的語 Wh 要素と付加語 Wh 要素の始発点として、' 位置が指定される。結果として、当該言語における主語 Wh 要素、直接目的語 Wh 要素と付加語 Wh 要素が Wh 島内部から移動する派生は排除される。スペイン語とイタリア語においては、主語 Wh 要素の始発点が' 位置と指定される点を除き、ドイツ語 (オランダ語) と同じ状況で想定される (Sabel 2002 : p.282)。これにより、(ii) の用例が説明される (Sabel(2002) は、Jaeggli(1988) から (iia) を引用している)。主語 Wh 要素が Wh 島内部から移動可能となる。Sabel(2002) の理論からすれば、その始発点として' 位置が指定される項としての PP (例えば、間接目的語 Wh 要素) もまた、Wh 島内部から移動可能と予測される。これは、本稿の (5a) の Torrego(1984) が提供するスペイン語の用例によって示される (便宜上、(5a) を (iia) として以下に再掲する)。しかしながら、Jaeggli(1982) は、(5a) と同じタイプの用例である (iib) を不適格と判断する ((iib) は、本稿の (21a) に対応する)。つまり、Sabel(2002) の論法は、スペイン語における話者グループごとの相違を説明できない。既に述べたように、直接目的語 Wh 要素が Wh 島内部から移動する (iia) が不適格と判断される。その一方で、Sabel(2002) は、それに対応する再述接語 (Resumptive Clitic) を随伴する直接目的語 Wh 要素が Wh 島内

部から移動する用例 (iiic) の適格性を説明できない ((iiic) は本稿の (22b) に対応する)。本稿において、話者グループごとの相違と (iiic) の適格性を説明する論法の構築を目指す。

- (ii) a. *¿Quéi no sabes quiénj compró tj ti? (Sabel 2002 : (13a))
 ‘What don't you know who bought?’
 b. *¿Por quéi no sabes quéj comprar tj ti? (Sabel 2002 : (13b))
 ‘Why don't you know what to buy?’
 c. ?¿Quienj no sabes quéi compró tj ti? (Sabel 2002 : (13c))
 ‘Who don't you know what bought?’
- (iii) a. ¿[A quién] dices que no te acuerdas quéi lei has dicho tj ti? (Torrego 1984 : (54a))
 ‘To whom do you say that you don't remember what you have said?’
 b. *¿[A quién] no sabías quéj lei regalaron ti tj? (Jaeggli 1982 : p.170, (4-151b))
 ‘To whom don't you know what they had given?’
 c. ¿[Qué libro] no sabes quiénj loi compró ti tj? (Contreras 1992 : (11b))
 ‘What book don't you know who bought it?’

- 9) この規制の妥当性は、Billings and Rudin(1996) が挙げる口語ブルガリア語の用例によっても確認される(口語ブルガリア語では、文語ブルガリア語の IO Wh 要素 (*na kogo* ‘to whom’) が *na koj* の形態で実現される)。

- (i) a. Kogo **na koj** e pokazal Ivan? (Billings and Rudin 1996 : (27a))
 whom-Acc [to whom] Aux showed Ivan
 b. **Na koj** kogo e pokazal Ivan? (Billings and Rudin 1996 : (27b))
 ‘Whom did Ivan shown to whom?’

- 10) 同様の指摘は、Grewendorf(2001 : fn.4) にもみられる。Grewendorf(2001 : fn.19) は、以下の用例を挙げ、本稿の貢献条件(CC) が適用されない話者グループの存在を指摘する(この話者グループに関する調査・論考に関しては、稿を改める)。

- (i) a. Na kogo kakvo e dal Ivan? (Grewendorf 2001 : fn.1, (i))
 [to whom] what-Acc Aux gave Ivan?
 b. Kakvo na kogo e dal Ivan? (Grewendorf 2001 : fn.1, (ii))
 ‘What did Ivan give to whom?’

- 11) 最適性理論 (Optimality Theory) に立脚する Müller(2001) もまた、(51b, d) の非文法性を説明する論法を提示する。しかしながら、この論法によって (50d) の適格性が説明されることはない。Billings and Rudin(1996) もまた、最適性理論の枠組みからの説明を試みる。彼等の論法は、本稿の (41a, b) と (46a, b) のすべてを適格と予測する。しかしながら、(46b) は、不適格と判断される (Müller(2001) と Billings and Rudin(1996) の最適性理論からの論考については、稿を改めて検討する)。Bošković (1997, 1998, 2002) では、経済性 (Economy) に基づいて、優位条件の用例が説明されている。解釈不可能な素性 [+wh] を付与された C に最も近い位置にある Wh 要素が Spec(C) 位置へ移動する (これにより、優位条件の要請が満たされる)。焦点化 (Focalization) の適用によって Spec(C) の右方位置へ移動する他の Wh 要素の相対的な語順は、自由なものとなる (主語 Wh 要素 (*koj* ‘who’) と DO Wh 要素 (*kogo* ‘whom’) の位置として、それぞれ Spec(T) と Spec

(Agr-DO) が指定される。付加語 Wh 要素の位置として、VP に付加した位置が指定される。(50b) の非文法性に対する (50d) の適格性が説明される ((49) の用例でも、同様である)。(43a) と (43b) の双方が適格と判断される話者グループでは、付加語 Wh 要素 (*küde* 'where') が VP に付加した位置に加え、Agr-DOP に付加した位置にも生成されると考えている (Bošković 1997 : fn.9)。しかしながら、(50) を説明する Bošković (1997, 1998, 2002) の論法は、(51d) の非文法性を説明することはできない。

- 12) (52a) と (2b) の相違が観察されるのは、付加語 Wh 要素 (*küde* 'where') に対して貢献条件が適用されない話者グループにおいてである。同じ話者グループにおいて、接語 (*te* 'you') に代わって Wh 要素 (*kogo* 'whom') が生起する派生に対して、(ia-d) の予測が可能となる

- (i) a.*Kakvo küde kogo udari?
 b.*Kakvo kogo küde udari?
 c. Küde kakvo kogo udari?
 d. Kogo kakvo küde udari?
 'What hits whom where?'

付加語 Wh 要素の生成位置として、VP 内部に加え、Spec(v) と Spec(T) の間にあるフェイズの先端部が想定されている。この付加語 Wh 要素のより上位の生成位置と Spec(Agr-DO) との位置関係はどうであろうか。Spec(Agr-DO) が付加語 Wh 要素の上位生成位置によりさらに上位である場合には、以下の (ia) が適格と予測されることになる (付加語 Wh 要素 (*küde* 'where') に対する貢献条件 (CC) の適用に関わりなく) (今後、(i) (ii) の予測を検証する必要がある)。

- (ii) a. Kogo küde kakvo udari
 b.*Küde kogo kakvo udari
 'What hits whom where?'

さらに、以下の (iii) の用例は、Spec(Agr-IO) が Spec(Agr-DO) よりも上位の位置を占めることを示す。ブルガリア語における Wh 島制約については、項を改めて検討する。

- (iii) Na kogo kakvo koga sa dali? (Dimitrova-Vulchanova and Hellan 1999 : p.503, (58))
 [to whom] what-Acc when Aux gave
 'What did they give to whom when?'

D-Linked Wh 要素が生起する (ivc) と (vb) は問題を提起すると思われる (本稿の仮説群は、(iva) を不適格と予測する一方、(vb) の Wh 要素連続 [*koi+na kogo*] ('who' + 'to whom') を適格と予測する)。

- (iv) a.*Ne razbiraš na kogo koj trjabva (Rudin 1986 : p.119, (83b))
 not you-understand [to whom] who-Nom is-necessary
 b. Ne razbiraš koj na kogo trjabva
 'You don't understand who needs whom'
 c. Ne razbiraš [na kakva žena][kakŭv muž] trjabva. (Rudin 1986 : p.119, (83a))
 not you-understand [to what kind woman][what kind man]Nom is-necessary
 'You don't understand what kind of woman needs what kind of man'
 (v) a.*Kakvo koj e kupil? (Bošković 2002 : fn.2, (ib))

what-Acc who-Nom Aux bought

‘ Who bought which? ’

b. [Koja knjiga] [koj čovek] e kupil? (Bošković 2002 : fn.2, (ic))

[which book]-Acc [which man]-Nom Aux bought

‘ Which man bought which book? ’

(ivo) と (vb) の適格性は、非心理動詞と共に起する主語 D-Linked Wh 要素の特殊性に還元されると考えられる。仮に、主語 D-Linked Wh 要素の始発点として、Spec(T) に加えて、その生成位置 (Spec(v)) も指定されると想定する。これにより、例えば (vb) において、DO D-Linked Wh 要素 (*koja knjiga* ‘which book’) と主語 D-Linked Wh 要素 (*koj čovek* ‘which man’) それぞれの始発点として Spec(Agr-DO) と Spec(v) が指定されることになる。前者の DO D-Linked Wh 要素が欠陥 [wh] として機能する (vb) 派生が適格と予測されることになる。

参考文献

- Adger, David (2003) *Core Syntax: A Minimalist Approach*, Oxford University Press, New York.
- Barss, Andrew (2000) “ Minimalism and Asymmetric Wh-Interpretation, ” *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, MIT Press, Cambridge, MA.
- Belletti, Adriana and Luigi Rizzi (1988) “ Psych-Verbs and Theory, ” *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 291-352.
- Billings, Loren, and Catherine Rudin (1996) “ Optionality and Superiority: A new Approach to Overt Multiple Wh-ordering, ” *Formal Approaches to Slavic Linguistics: The College Park Meeting, 1994*, ed. by Jindřich Toman, Michigan Slavic Publications, Ann Arbor, Michigan.
- Bošković, Željko (1997) “ On Certain Violations of the Superiority Condition, AgrO, and Economy of Derivation, ” *Journal of Linguistics* 33, 227-254.
- Bošković, Željko (1998) “ Multiple Wh-Fronting and Economy of Derivation, ” *Proceedings of the 16th West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. by Emily Curtius, James Lyle, and Gabriel Webster, 49-63, CSLI Publications, Stanford, Calif.
- Bošković, Željko (1999) “ On Multiple Feature Checking: Multiple Wh-Fronting and Multiple Head Movement, ” *Working Minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 159-188, MIT Press, Cambridge, MA.
- Bošković, Željko (2000) “ Sometimes in [Spec, CP] Sometimes in Situ, ” *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 53-88, MIT Press, Cambridge, MA.
- Bošković, Željko (2002) “ On Multiple Wh-Fronting, ” *Linguistic Inquiry* 33, 351-383.
- Chomsky, Noam (1980) “ On Binding, ” *Linguistic Inquiry* 11, 1-46.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) “ Minimalist Inquiries: The Framework, ” *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) “ Derivations by Phase, ” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, MIT Press, Cambridge, MA.
- Collins, Chris (1997) *Local Economy*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Contreras, Heles (1992) “ On Resumptive Pronouns, ” *Current Studies in Spanish Linguistics*, ed. by Héctor Campos and Fernando Martínez-Gil, Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Dimitrova-Vulchanova, Mila and Lars Hellan (1999) “ Clitics and Bulgarian Clause Structure, ” *Clitics in the Languages of Europe*, ed. by Henk van Riemsdijk, Mouton de Gruyter, Berlin/New York.

- Franco, Jon and Susana Huidobro (2003) "Psych Verbs in Spanish Leísta Dialects," *Linguistic Theory and Language Development in Hispanic Languages*, ed. by Silvina Montrul and Francisco Ordóñez, 138-157, Cascadilla Press, Somerville.
- Freidin, Robert (1992) *Foundations of Generative Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Freidin, Robert (1995) "Superiority, Subjacency, and Economy," *Evolution and Revolution in Linguistic Theory*, ed. by Héctor Campos, and Paula Kempchinsky, 138-167, Georgetown University Press, Washington, D. C.
- Freidin, Robert, and Howard Lasnik (1981) "Disjoint Reference and Wh-Trace," *Linguistic Inquiry* 12, 39-53.
- Grewendorf, Günter (2001) "Multiple Wh-Fronting," *Linguistic Inquiry* 32, 87-122.
- Guimarães, Maximiliano (2003) "Effects of Shared Constituency on Superiority Effects," *Proceedings of the 22nd West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. by Gina Garding and Mimu Tsujimura, 231-244, Cascadilla Press, Somerville.
- Heck, Fabian and Gereon Müller (2000) "Successive Cyclicity, Long-Distance Superiority, and Local Optimization," *Proceedings of WCCFL* 19.
- Hornstein, Norbert (1995) *Logical Form: From GB to Minimalism*, Blackwell, Oxford.
- Ishii, Toru (2000) "The Minimal Link Condition and the Theory of Movement," *English Linguistics* 17, 305-329.
- Jaeggli, Oswald (1982) *Topics in Romance Syntax*, Foris, Dordrecht.
- Jaeggli, Oswald (1988) "ECP Effects at LF in Spanish," *Advances in Romance Linguistics*, ed. by David Birdsong and Jean-Pierre Montreuil, Foris, Dordrecht.
- Jaeggli, Oswald (1991) "Head Government in LF-Representations," *Logical Structure and Linguistic Structure: Cross-Linguistic Perspectives*, ed. by C.T. James Huang and Robert May, 79-109, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Kayne, Richard (1983) "Connectedness," *Linguistic Inquiry* 14, 223-249.
- Lasnik, Howard (1999) *Minimalist Analysis*, Blackwell, Oxford.
- Müller, Gereon (2001) "Order Preservation, Parallel Movement, and the Emergence of the Unmarked," *Optimality-Theoretic Syntax*, ed. by Geraldine Legendre, Jane Grimshaw, and Sten Vikner, 279-313, MIT Press, Cambridge, MA.
- Müller, Gereon (2004) "Phrase Impenetrability and Wh-Intervention," *Minimality Effects in Syntax*, ed. by Arthur Stepanov, Gisbert Fanselow, and Ralf Vogel, Mouton de Gruyter, Berlin/New York.
- Pesetsky, David, (1982) *Paths and Categories*, Doctoral dissertation, MIT.
- Pesetsky, David, (1987) "Wh-in-situ: Movement and Unselective Binding," *The Representation of (In) definiteness*, 98-129, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pesetsky, David, (2000) *Phrasal Movement and Its Kin*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Richards, Norvin (1997) *What Moves Where in Which Language?*, Doctoral dissertation, MIT.
- Richards, Norvin (1998) "The Principle of Minimal Compliance," *Linguistic Inquiry* 29, 599-629.
- Richards, Norvin (1999) "Featural Cyclicity and the Ordering of Multiple Specifiers," *Working Minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 127-158, MIT Press, Cambridge, MA.
- Rudin, Catherine (1986) *Aspects of Bulgarian Syntax: Complementizers and Wh Constructions*, Slavica, Columbus.
- Rudin, Catherine (1988) "On Multiple Questions and Multiple WH Fronting," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 445-502.
- Sabel, Joachim (1995) *Restrukturierung und Lokalität* (Studia Grammatica 42), Akademie Verlag, Berlin.
- Sabel, Joachim (2002) "A Minimalist Analysis of Syntactic Islands," *The Linguistic Review* 19, 271-315.

- Suñer, Margarita (1992) " Indirect Questions and the Structure of CP: Some Consequences, " *Current Studies in Spanish Linguistics*, ed. by Héctor Campos and Fernando Martínez-Gil, Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Suñer, Margarita (1995) " Negative Elements, Island Effects and Resumptive *no*, " *The Linguistic Review* 12, 233-273.
- Torrego, Esther (1984) " On Inversion in Spanish and Some of Its Effects, " *Linguistic Inquiry* 15, 103-129.
- Uriagereka, Juan (1999) " Multiple Spell-Out, " *Working Minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 251-282, MIT Press, Cambridge, MA.